光在りて闇はその黒を増し
闇在りて光はその白を増す
両者は対岸に在りながらその差は明白ではなく
常に混然一体となり存在する
二者を切り分けられるのは
ただ神のみと心得よ

ぱたん、と音を立てて書物を閉じ、黒髪の少年が真横を向く。その目は期待に輝いており、口角は上機嫌そうに上がっていた。

しかし、そのきらきらとした視線を向けられた当の"本人"は、空洞のような目を一度瞬いて小首を傾げるばかり。

「うーん、まあそうだよね。上手くはいかないか」

期待通りに事が進まなかったようで、少年は軽く口を曲げたが、それもすぐ元に戻る。彼は自分の隣に腰掛ける、真っ暗な人影に白い手を伸ばし、頭を柔く撫でた。

「本来僕達には必要ない事だ。お前は自分のペースで大きくなりなよ、ジァン」

ジァンと呼ばれた黒く、小さな人影は、解っているのかいないのか、ただこくりと頷いた。

——森を分け入った先にぽつんと建つ古びた小屋には、現在ふたつの命が気ままに瞬いている。

母なる闇と父なる光が生み出した妙なる愛し子のひとりであるヨーは、闇の愛を受けた絹のような黒髪と、光の愛を受けた特異な能力を有する少年だ。彼はひとりの子を授かり、この小屋の中で命を生み出した。それが先程彼がジァンと呼んだ存在だ。

ジァンは殊闇に愛された子供であった。それは人というよりは闇の具現化で、光が閉ざされてしまったこの世界において彼の輪郭を保つのは難しかった。周囲の闇に溶け込んでしまい、存在が希薄になってしまうのだ。ジァンを世界に"固定"する為にはヨーの有する力が必要だ。しかし四六時中ジァンと共にいるのは現実的に不可能。そこでヨーは、ジァンの良い固定方法を模索しつつ、彼を養育しているという訳だ。

先程の行為もそのひとつ。いわゆる読み聞かせというやつだ。ヨーはジァンに本を読んでやっていた。森に迷い込んだと思われる者の落とし物であったのだろう、小難しい本だ。

「子は寝て育つ。で、難しい事に触れると子は眠くなる。寝るかなと思ったけど、本来不要な行為に体が傾きはしないよね」

ヨーの行う養育は、子育てというより探り探りの実験に近かった。聞きかじった事を片っ端から試してみて、ジァンの反応が良かったものを続けてみる。それを繰り返して、純朴な闇を育てていた。

次は何をしてやろうかと思案するヨーの髪をひと房掴み、ジァンがくいくいと引く。

「ん？難しくないものの方がいい？それとも何か別の事をする？」

ジァンが木製の簡素な椅子から立ち上がり、机に歩み寄る。そこに置かれていた手製の櫛を手に取ってヨーの前に示した。

ヨーはその素振りに、面白そうに柔らかく微笑んでみせた。

「お前は髪が好きだね」

ヨーの射干玉の髪は、本人の背丈の倍以上程の長さを持つ見事なものだ。神籬(ひもろぎ)と呼んで差し支えない程の美しさの髪を保つには、彼が超常の存在といえど多少は櫛削ってやらねばならない。ジァンは彼の髪をいたく気に入っており、しょっちゅう髪に櫛を入れたり、編み込んで遊んだり、時には引っ張って困らせたりしていた。恐らく、ジァンにとってのライナスの毛布。触れていると落ち着くのだろう。ヨーもそれを解って、ジァンの好きなようにさせていた。

髪を適量持ち上げて、櫛を通す。手製の櫛はお世辞にも歯の間隔が均等とは言えず、うっかり肌に触れてしまうと傷が付く。しかし生まれたばかりのジァンが"加減"というものを解るはずもなく、力技で髪を梳かす事も多かった。

「優しく頼むよ？」

　ジァンはこくりと頷き、彼なりの"優しく"を心掛ける。静謐ながら、穏やかな時間が流れていく。
「満足したら川にでも行こうか。ジァンがどんな風に髪を梳かしたか見ないとだから」
　再び頷くジァン。川はヨーの持つ光を受けてきらきらと水面を輝かせるので、ジァンも眺めているのが好きなのである。
　自由気ままな子育て。二人で過ごす時間は快いものだった。

　ある時、ヨーは紙片を手に何やら思案をしていた。ジァンがその様子を不思議そうに眺め、ヨーの髪を引く。
「ああ、新しい絵本を作ってやろうと思ってさ。お気に入りのものはあるけど、そろそろ新作も恋しいだろ？」
　紙片にはヨーが自ら綴った物語が記されている。遠く離れた場所に咲く不思議な力を持つ花を探して、主人公が冒険を繰り広げるといった内容のようだ。
「今回のも面白いと思うよ、僕はどうやら才能があるみたいだから。なんてね」
　紙片を一度机に置き、ヨーはひとつ頷いた。
「よし、物語のクライマックスのシーンには実際の花を使おう。押し花で花畑を作るんだ。どう、楽しそうだろ？」
　花畑。光の届かない世界では遠くなって久しいものだ。特殊な生態の花と、あとは時折夜光性の花がある程度。それでもヨーが語って聞かせる花畑というのは夢のように綺麗で、ジァンもいつか見たいと憧れていた。
「うん、そうと決まれば出かけよう！」
　おいで、と手を差し伸べると、ジァンはその手をするりと無視してヨーの髪をきゅっと握った。
「うん、まあ解ってたよ。お前はそういう子さ」
　ともあれ、はぐれないようになっているのであればそれでいい。二人は小屋に簡易な鍵を掛け、花を探しに繰り出した。
　森には一部に人の通る道が敷かれているが、後は基本的には獣道があるばかり。大きな石がごろごろ転がる足場の悪い箇所や、段差になっている所、草いきれで毒虫が這っている所など、花までの道程は決して平坦なものではなかった。しかし、そんな道でもヨーはものともせずに軽やかに進み、ジァンも多少もたつきながらそれに付いて行った。
「確かもうそろそろ見えてくるはずなんだよな……」
　迷い人だったかもしれない旅人が教えてくれた、花の群生地。経路を何度も思い出しながら進んで行けば、不意に開けた場所に出る。
　そこに広がっていたのは、淡く光を放つ白い小花が咲き誇る草原だった。時折吹く風にそよりと揺れ、楚々とした美しさを見せていた。
「へえ、これは中々見事だ」
　花畑の中に一歩、二歩と足を踏み入れる。ジァンは何やら思う所があるのか、中々一歩を踏み出そうとしないが、
「水辺か何かだと思ってる？怖くないよ、おいで」
　ヨーがそう声を掛けると意を決して、さく、と草を踏み鳴らした。
「あの大きさの紙を埋めるにはどれくらい摘めばいいかな……」
　早速花を摘み始めるヨーを、ジァンはしばし眺めていた。彼は覚えたての絵本の内容を、頭の引き出しから何度も取り出している。そしてふと、あるシーンを見つけ出した。
　ジァンは再びヨーの髪を引き、彼の注意を引く。
「ん、どうかした？お前も摘むのを手伝っておくれよ」
　ヨーの言葉にジァンが返したのはジェスチャーだった。両手を大きく広げ、軽く円を描くように回してみせる。ヨーはその意味にすぐさま思い当たった。
「沢山欲しいのかい？でも花なんて何に使うの？」

ジァンは何やら息巻いている様子だった。ヨーは首を傾げながら、指示通り多くの花を摘み取っていく。
「よし、こんなもんでいい？」
壊れかけの籠一杯に摘んだ花を見て、ジァンはこくりと頷いた。
「じゃあ帰ろうね。ほら、僕は摘んだから荷物持ちはお前の役目だ」
ジァンが片手で大きな籠を抱えるようにして、もう片手でヨーの髪を掴む。
そうして二人は、暗がりの中を帰路に着いたのだ。

薄い紙を並べて小花を敷き詰め、上からまた薄い紙を被せて平らな重しを乗せる。
「よし、あとは一週間くらい放っておけば出来るはず。絵本の為にこれだけ情熱を注げる僕ってやっぱり凄くない？どう？」
自慢気にしながらジァンに尋ねれば、彼はこくりと頷いてみせる。恐らく意味はあまり解ってはいないのだろう。
「えーと、製本用の糸はまだあったはず……」
ヨーが傾きかけた棚を探している間、ジァンは部屋の片隅に置かれた籠を眺めていた。まだ新鮮さが保たれている、淡く光る小花がこんもりと山を作っている。
ジァンはしばし花を注視した後、小さく頷いた。
「さて、花が仕上がらない事には絵本作りも出来ないし、これからどうしようか。お絵描きでもするかい？」
するとジァンは、森の中で見つけた丁度いい大きさの枝を持ってくる。
「ふふ、やる気だね。じゃあ今日は色んな魚の絵を描いてみよう」
砂地にしゃがみ込み、枝を使って大小様々な魚を描く間。ジァンは勿論それを楽しんでいたのだが、頭の片隅には別の事があったのだ。
それが何なのかをヨーが知る事になるのは、もう少し先の話だ。

花を摘んだ日以降、ジァンはヨーが何らかの作業をしている間、彼に背を向けて何かを行っていた。側には常に小花の入った籠があり、花をいくらか手にしては弄っているのだ。
「ねえジァン？何してるのさ」
ヨーが背後から覗き込むと、ジァンはいつも花の中に手を慌てて突っ込んでごまかしてしまう。そうして首を横に振ったり、手でバツ印を作るのだ。
「何だよ、僕に隠し事？」
拗ねたようにヨーが口にすると、ジァンは困ったような素振りを見せるものの、ヨーに対して自分が何をしているのかを伝える事はしなかった。そんなジァンを眺め、ヨーは小さく溜息を吐く。
「ま、いいけどさ。で、今日は髪梳かさなくていいの？」
そう声を掛けると、ジァンは弾かれたように立ち上がって櫛を持ってくる。ヨーはくすりと笑って椅子に腰掛け、ジァンの好きなようにさせた。今日はどうやら三つ編みを作りたいらしい。思案しながら髪束を組み合わせていき、所々が捩じれている個性的な編み込みを施していく。
「解けるくらいにしておいてくれよ？」
ジァンは頷いて、今日もご機嫌そうにヨーの髪を愛でるのだ。

ジァンがヨーに対して何か秘密を作った日から、一週間程が経過した。そろそろ押し花から水分が抜け切り、完成している頃合いでもある。ヨーは押し花から重しを退け、様子を確認してみる。花弁がしっかり美しく開いた、見事な押し花の数々がそこにはあった。
「うん、中々いいね。絵本作りの再開だ」

　棚に大切にしまってあった紙片を取り出し、接着剤や製本用の糸等を準備していく。ご機嫌に鼻歌を歌いながら作業に取り掛かると、小屋の片隅でジァンもまた何か始めた様子だ。
「お前も作業？結局何も教えてくれないままだけど」
　ヨーに背を向けて手をちまちまと動かしているジァンは、振り返る事なく頷いて応える。まあいいよ、とヨーが作業に向き直れば、ジァンも真剣に取り組み始めた。
　小屋の中に静かな時間が流れる。時計は無く、体内時計でしか時間は計れない。世界にまだ太陽が燦燦と輝いていれば、南中を回った頃合いだろうか。よし、と声を上げてヨーが椅子から立ち上がる。
「ジァン！出来たよ！僕の新作だ、クライマックスはとっても綺麗だよ」
　すると、まるでその声に応じるように、ジァンも勢いよく両手を上げた。そして振り返り、後ろ手に何かを隠しながらヨーの所へ歩み寄る。
「お前も終わったの？じゃあ見せ合いでもする？」
　ジァンの空洞のような両目が輝いて見えるのは気のせいだろうか。ヨーは彼の前に仕上がったばかりの本を差し出すと、ジァンも両手をこちらに突き出した。
「……え、お前、これって」
　ジァンがヨーに内緒で作っていたもの。既に一部は枯れて色褪せ、茎も張りを無くして萎れており、形も歪ではあるが。それは夜光性の小花で作った花冠だった。面食らうヨーに、ジァンは本を指さして何かを必死に訴えようとする。
　彼はかつてヨーが作った本の内容をずっと考えていたのだ。まだ年若く未熟だった王子が城下を襲う魔物を退治した事で株を上げ、最終的には次代の王として選ばれた物語。最後は戴冠式のシーンで幕を閉じていた。絵に描かれたものであるはずの冠が本当に眩く見えて、ジァンにとっては宝物となっていた。その宝物を作ってヨーにあげるという形で、彼は彼なりの愛情を伝えようとしたのである。
　最終的にヨーはその意図に気付き、ふにゃりと表情を緩ませる。
「……お前って子はさ」
　くすくすと笑いながら、小さなジァンと目線を合わせるようにしゃがみこむ。ジァンが両手でヨーに花冠を被せ、空洞の目を嬉しそうに細めた。つられてヨーの顔も綻ぶ。
「そうだね。この冠のお礼に、お前が立派に成長するまでは、僕がしっかり守ってあげよう」
　そうと決まればまずは読書の時間だ、とヨーは本を広げ、読み聞かせを始める。美しい物語の中と、ヨーの射干玉の黒髪双方に、愛らしい花が二人を祝福するように咲き誇っていた。